日本書紀

十四

太政官文庫
和書門
類 八四九八
號
函 一九二
架 二〇
冊

内閣文庫
和書
類 八四九八
號
函 一三七
架 五
冊 二〇

内閣文庫
番號 和 8498
冊數 20 (9)
函號 137 45

国立公文書館
National Archives of Japan

廣辻氏
藏書記

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

日本書紀巻第十四

大泊瀬幼武天皇（おほはつせわかたけの）

大ちをせ（おほ）ゐけの天皇

雄略天皇

雄朝津間

雄略天皇

内閣文庫

雄略天皇は、允恭天皇の五ちらすらせ給ふ。みこいます天皇あれまして、ひのみ殿（神）にてひとなりてしきくまりまして、人を選ばせ給ふ。

三年八月、穴穂天皇、沐浴あらせ給ふ。人をおきて上のうやまいてまし

はひよさかどのの（樓）ほのまきしてみあ
をひさまふよはておほこを命し
てゝこのひのかきこうめいたうし
てきれをみこをひて面のしひ
きをまわすふるみものゝくわを（言談）
もてしをふひをそる皇后（きさき）よりをて
のゝまはく

去来穂別天皇のひめみこを中蒂（なかしひ）
姫（めの）皇女とまうしはまきの名ハ長田大娘（をさだのおほをとめ）

皇女なるハ人ほゝきの天皇のみこ大草
香皇子長田のひめみこを娶て眉輪
王を生まりこの後よあれなの天皇
根臣（なのをみ）がよこしまをとりたて大くさ
のみこをころして中蒂姫皇女
をゝていきさゝ者やしをふ詔ハあれ
ほの天皇の紀（みまの）よあ
吾孫（あこ）妻とろの女（妹と）（きさい）（のくにこと）汝（いまし）もつまりく
もはまりとりまる朕まゆきの王（みこ）をおそ

さとのこまふ眉輪王はつくしてさのの
のトあそびさもふれてとくくよ
みよのうをもきこつきてすーてあ
なたの天皇きき弟のひさよまうし
治て昼ゐひて うるふをふしふまん
をうるまゆるの王そのこきてうのは
せるをうつひてさしころしまつ
是佐この日大舍人 姓字を ちし佐て
天皇よまうしてまうさく 穴穂天皇

眉輪王のさめる栽 されふまひいとは
うは天皇おほきよおとろき治てもれ
ちち兄等をうるかひ治て甲を式
さちをきて五兵をひきあてこ佐う
いくさのきみとかるの治ふてい釣白彦
皇子をせ矢とひさまふ皇子そのやぶん
とそをみくうをまうくてそ
のいうまうは天皇をれもちちを
ぬひてころし治ふまう 坂合黒彦皇

ゐをせめとひ給ふ皇まさそこなはん
とおもふこゝろをさとりて
のゝしりまもる天皇みいのわいはくさ
うんなりあれこゝろまなひと眉輪王
とこゝろをんとおほせのゝめるその所由
をかんがへとひ給ふ眉輪王の云臣
宗動
まをさくきゝあをとゝえをゝ父
天位
のあををむくふのみ坂合黒彦皇まふ
くうゝうゝゝまをとをゝしてゐ

ヒのみことをかゝひはひとゝまひ
まをえて出て門おほひまもりきこの
宅にはけて入給ふ天皇ヒはのひを
てこれをこはめさまふ大臣はひ
をもてつゝとまうさくけゝしき
く人臣事あり時まげて王室に入と
ふといまこん君王臣の舎にかく
ろこゝをまきにいゝ坂合ゝひこ
のみことまをのみとふく臣の心を

めのまえて臣の舎人きませのいづしの人
でをくわまつる人やうれよりたて天皇
まさまにいくさをおこして大臣
のいつをかうみ給ふ大臣戻よりくし
て脚帯（あゆび）をうふ時に大臣の妻（つま）脚帯（索）を
りてきさわてかゆしうろやれ
して寄ていく
おミのこひさしのもうさをるくたち
まはさしてあふひうるる

大臣そひとそでをひて軍（こう）
門（と）まうそもてれうみてまうけく
臣（おみ）はこせるといふもあつておほん人（余）
ともをうもさすもうれなんいま
この人いつるとのかいやしきひの
心さしもうふべきことうるとと
うはまきに臣にあうれをふてな
ばくい大王臣のもあ韓媛（からひめ）とつ
らきの宅七區（ところ）ともとてまつて

りて法をあのなるんと海うを天
皇ゆう法をしして火を法を宅
をやきさまふこてよ大臣とくろひこのみこ
とまゆとのみことやきころさしめ
と我よ坂合部の贄宿禰ここのか
をひをうつてやきころさしめ其を
見ると名字をやき所をひろひと
まはひよ骨を入ることかをと
一棺にいれて新漢擬擬の字はさしうつ見擬の年の

みれこのをうよはもせふれり冬十
月ひのとのひはの朔日天皇宍穴穂
天皇の宮きき市辺押磐皇をて
国をはうつてちうよ後の事をゆ
ふはんとおほこうみてそしち
はひをいちのものみこのとち
うていはをりてかりせんとちき
足野あそひせんとき、めてのまはく
あふこのさきき山の君韓袋はうさく

命あふこの来田綿（くさ）敷屋野（しやの）より猪鹿（ゐしし）さ
もあると其さきしる角（つの）かきの枯えるを未
るる其はぐくるる雨とたるの弱木林
をいふくい者あさきから似るる
かはくい皇るとかんるはきのそぐしき
月さむ勢うそうしる孟冬作陰
もあそひていさのうをさのしん
道途
てりてもせいんとのるまふ市邊押磐（いちへのをしの）
皇るそれちちしさうはてもせうはん

うる大泊瀬天皇ゆゑひき薄（すゝき）ひし馬
をもせていはちのよもひして猪（ゐ）あり
さのるまもしてもれもるる市辺をるもの
ことをいこうしあひつみこのるり佹（さ）
伯部（はくべ）の賣輪（うるわ）名仲（まなか）るるをかつていは駭
けあるて、せもちべをこひまるひ
所由解
ようひるひてあと小まるかふ天皇
子頭脚又側
れれをころしあつこの月御馬（みまの）皇
るいんさき三日のきみ殿（むさ）狭（さ）うるる

かわしゆつをもてみそろをやもとゝ
ほりていてまし不意よ道よ邀るいく
よあつて三ヒのいもゝ井のほとゝりあひ 側
さかふつしつゝてとゝれ 提
ろろさろよのそんて井をさしてと
こひて云この水をおほんさつのミそ
のむこゝをえもやひとゝのきこるひと 王者
さえのまし十一月三川のんひの朔き
のんひの日天皇佐のさくよおほせて 有司
さゝみくゝを泊瀬朝倉よ向ふ歩て 壇
あまの川日つきしろしめしたひよ宮
をさゝめて平群の臣真鳥をりて大臣
とゝ大伴のむらじ室屋物部のむら
し目をりて大連とあし
元年春三月うのえいぬの朔三川の
孫の日草香の幡梭姫皇女橋姫の名を
て、皇后とゝ佐この月ろうの妃
をゝて佐元妃とゝかつゝきの臣大呂の

むなめ韓嬢とまうす白髪さけひろく（武廣国）
まをす（押雅日本）むかつやまとこの天皇と日めの
ふしひめ（まきの名坊情り）ひめみこ（りしあのひめみこ）
とを生ませり此むめみこそ伊勢の太神
の祠まさるべき次ぎ吉備の上道臣うむそ
め雅嬢（ちひめ）をんなり（一本に云吉備の窪屋臣とむそめ）二はし
らのひこみこを生ませり長を磐城（いそき）の
みこ（まうし）少を（ちをと）かし川の日の（雅星）
のみこ（まうす）（下の矢）次ぎ春日（かすが）の和珥（わに）の
臣ふのあかむすめ（深目）を春日の大いらつめ（娘）のひゑみこ（まきの名高橋皇女）
を生ませり童女君（わらはきみ）とまうす
なり天皇一夜（ひとよ）みあひしてもうめる
る女（をんな）を生まる天皇うかひ給て
ひるは居はいはず女（をんな）あるきまくときり
をもうして天皇大殿（おほとの）おもてまくる物部（もの）
の目の大むらつかつ女（をんな）庭を過
るを目の大連みてまちきこ

ちかくまうて云かほよきかたち女ないし（古）
へ入いつきと河内国ちひとやきくよ（この古語いまはた）
まうん志めやういきき清庭よあめく
ひとは誰か女ときいつる天皇のくまは
く何のゆつかうとつやや目の大むしこ
ふつてまうさく臣女のあわくをみ
るよそうとよく天皇よにさまうる天
皇のうまはくこれをもつひとえしや容儀
うひとをいまいふ取のとも志ふ

きとも朕一よあうてもうて胎女とうむ（胥典）
とあやし是みたてうこのひをるせ
を大むしまうとく志ふいたれき殊常
一よいくさひかめし天皇のうまは
くセさひのきとのうまふ大むしは
うさく叶娘子きよ貴身をりつておも
く一よあいうさてまいるいたく
人そやきくうまひをなつてひとの他
いさ式ようあうをきひ好ふそ臣う

ぎまきそくみ　や　ぎ　ひ　く　ち　う　ば
をもて　射　ふ　く　よ　ま　れ　ち　ち　こ　ぬ　い
き　人　や　夜　も　そ　う　あ　ひ　ま　て　う　う　わ　よ
う　ま　ひ　を　る　し　ば　ま　や　天　皇　大　む　し
よ　み　と　の　し　て　女　よ　を　り　て　皇　女　と　し
母　を　も　て　妃　も　し　る　ま　ま　こ　や　大　年
ひ　の　と　の　と　わ
二　年　秋　七　月　百　済　の　池　津　媛　天　皇　の　あ　わ
む　と　そ　る　る　ま　ひ　ま　ま　て　石　河　の　楯

日本ニ云名阿股合首祖楯　ヨリ　嬪　ヒメ　モ　ヌ　天皇　カ　ホ　キ　ヨ　ソ　ワ
ま　て　大　伴　の　室　屋　の　大　む　し　る　み　と
の　し　て　未　目　部　を　て　夫　婦　の　四　支
を　水　ヨ　も　て　假　麻　の　上　ヨ　を　き　て　火　を
て　や　き　こ　ろ　し　た
百　済　新　撰　ヨ　云　た　ち　の　と　の　み　の　と　益
國　王　ヨ　た　天　皇　に　何　禮　奴　跪　を　ま　し　て
き　ま　て　女　帝　を　く　く　ま　ま　む　墓
尼　夫　人　の　女　と　適　誓　女　帝　と　ま　く　八

てんしゃうこうたいてんのうさまのおんとし
冬十月のつごもりのひ　ほつ国の朝臣のもとの
の日　の宮にいでまし　ひのえのの
日　御馬瀬にいでましてやまのはきる
おほせてのわしこまふこるよのほの　虞人
ひろき　そこにゆくいまは日もるふかさ　移影
みるとをつせハつをとるわきこと　元日
よ大小鳥しを海きる　はきさんと八
はひよちやいはこよめくりいこふ　林　泉　鹿　憩
て藪澤　相　をあそひてあひと　行夫
をやもめ車馬をかそふ　まちきこちち
ふとりてのこまはくふるよものもし
ひいの　勝夫　もてをなを海をはこ　鮮　割
しむいんおのしもこるはくんは
ちきこちちえこつやさハこいよ天皇
大ういうまして刀をぬいておほんむ　御
まそいい大津のむまひをきわはふこの　青　馬飼
日　車駕　みとこのこ　よるいふわ

まん国の内よおろおほんさうをくく
こしふるひおけ是よりておほきさき
ときさ貴ときこうえ笑して大よおちぶ
やまじのうひめ日ひ矢をしておほみき酒
をさけてむかへてまたしむ天皇
うひめのかほまこくまこうや面貌端麗
ひうなうをみそれもてまれもうか和
れしひさまふてのうまはく朕あよ顔 恥色
いまうよ貴えまむをみまくほう

せまりやとのうほひてそれもちあひ
うたたへて貴きの宮よ入まめおほ
きさおうこうたてのうまはくけふのの
をうおほきよとのちうをえうわ猪ち
きみさちとるまたはたうして野のう
あへせんとそれめとふよ猪ちきうち
饗 歴
えうへやとれ故おのれいのかけて
のうまふおほきさ沼うみことのかのう
こうをちうしめして天皇をうくさ

めさてまりをてのゝ はゝくまちきみ
さち階下のゝ あそひよりてみる 堵
ハよ 宮人部をゝきさ はゝんゝおは
ゝてまちきゝゝちよひ ゝをゝ
さゝんゝてまちみゝちのゝ 咤
ゝんつゝゝはゝちのなわまゝこゝて
まゝハゝと難ゝんゝ今 旦 ゝてまりゝゝ
おそゝゝゝ我りてゝちゝむゝゝをせ
むゝゝちての 長野 ゝゝの

ゝゝゝ 和のゝくゝゝれをゝてゝてまち
らん天皇いゝまひてゝうけゝまゝてのゝ
酒ゝくゝゝ 賞ゝれゝいゝゝ 弐人のゝ
所をゝゝつゝきひとゝの心をあひゝま
ゝゝゝこのゝきゝれゝうおほきゝす 天皇のよ
ゝこひゝゝをゝみゝてなゝて えゝき 歓喜盈懐
まゝてまゝ人をゝゝてまつゝ 知 ゝんゝゝ
ほゝてのゝゝますゝくゝ 我 ゝくゝや人 兎
田の御戸部 まゝきゝのゝゝうあめこの二
真鋒田高天

人をあて海さるくちをくさてまたわて
害人部と七人とこいまうし給ふこれ
まゆくさきやまもと国造あらのそ 吾子籠
くひさほこ島別をさてまりをて害
人部と八臣連伴造国造まきたくが 狭穂
ひはきくてまつるこの月史戸河上舎
人部をおる天皇みこころをもて師
としまひあやまちて人をころし
給ふことおほし 天下そ至てまま

さくもれそくあ
なわとさぐ 愛義 ふくみ給ふ而ハふ人ひと新
鬼狭のもぐら 村主 青ひのくゆの民使 博
とこふなる 徒
三年文四月あ 何閉 の臣くまみ 磯持斗 きの名ハ
拷懸のひのみと湯人の庁城部のも
 武 麦
けさけひことをこちて国うくふ
けひこひのこをけの国つをてち
まめさわとるけひこう父枳苫 喻こ

のたてまつりを学て五さ五ひの月五をよ
ぢんまつりおそれてしまあひこを戸城
河よあとらへいさるひてうついしめん
さあきもきてようて其ゆくわもしく
してうちころしけり天皇きこしめ
して三月ひをまきしてひめみこをえんく
とは学んさまふひめみこうへてまつり
まはく妾れ妾はしらんとるものしてひめこあ
やきかくみをもちていそ河よいるわまして
五十鈴

ひとのありぬ所をうかがひてうこをう
たてまつりき死ぬ天皇ひめみこのみ
いとをうるひ始てたるよやミの夜よ
ささすかうさやとめ始を乳をち河
東西
上虹のこゆることおろちのごとくまして
まりえいつたえをすものあるべ
のさた処をほりてあやしきかゝみ
神
をえるわうつゆくこといまぶとをう
ぞしてひめみこのりをえてさ汎

てられをみれば服の中は物あり水の中
は石あるごとし 杵(きね)宮喩(こゝ)にはまつて
子のはらをきよむるゝ、ものゝえくわゝ
はてゝ子ところをてゝものを悔て国見をむ
くひころさんとハいそのうゝの神宮は
さけかくれぬ
四年春二月天皇うゝらき山よりう
しさまふるもちまちは長人さつき
ひとみゝ未さかてしさるむひあむ 丹谷

のそのありうはそうゝ天 西貌容儀
天皇ゝ神なりとゝろしあせとなを 相似
石のごとくはてのゝ 何処
そさけさうきひとゝうてのゝまもく 長人
あり人神そまは王のゝれをるのれ志 現
ふしてのちゝもん天皇ゝて中
さはもく朕(おのれ)ハゝれ応導 ゝけの尊なりと 武幼
さけさう義人つきよ名のりてのゝ
ゝ僕(やつれ)ハゝれ一事主の神なりと侍む

ものゝふのしむてひとつの
庶を駈遂てこもく相やきるつるを
ゆはたてむさのくちをるつてそんを
辞
をいやくしく恰ゝ人てひゞ逢仙の
をくなるこゝろのこゝろ日くれ田わや
ミて神天皇をあひをくさてまつ
見てくめゝてまたこの時お
未月水
ほんゝうゝこしまちはくいきほひ
ま海そ天皇なわと秋八月うのよ

うの翔つちのさるの日ゝ野の宮
よいてまたのいぬの日河上の小野よ
いてまて虞人ゝみをのわしてを
しをかゝをめゝ恰ゝ衿ん衿ん
めてまちゝ恰ゝ蚊あぶとひきさわて天
皇のゝゝむきを臂替ゝこゝかけゝ晴玲ゝ
ゝちまちゝとびきゝてあゞをく
ふてまて去ぬ天皇の心あることを
ろうひゝまゝ

みとのりして　のぐまはく　脇さあ
あきはをほめて　奇　ようこせよまち　賦
きこしめつてもむりのなし　天皇
きりもちろ口號してのぐまはく
やまとのおほくにのさけをもつふい
ちもりをこのことおほまへよまうい
一本　おほまへよまをんとふをもて　おほみ
おほきみよまうそとふよろさう
よふこをきつしてもまきのあく
らをくしいまとふよろ

ちはまきのあちよろこしもし
まりとろいませまいまつとも
させまくてふにあぶうきつき
はをのあぶをあき川そのくひを
むりもおほきみよ国はふる
かをうもあきはしせの海と　一本
りとふうもとりてうくのをとろよと
むとそうりのやまをのくよをあきつ
しまとふ
のりうう

まりて蜻蛉をほめてこのこころを名
地

はせて晴嶮野とはし

五年春二月天皇の狩き山のわ

し給ふあやしき鳥さちもちゆきき

虚

ものおほきさ雀のごとし尾なが

して地にひなわうのなき給ふとぬく

といふをもちゆして嗅猪をもれて草

の中をあるくさまを見て人をおし

うわひと樹にのぼりおほきにおゆ天

狩猟

皇をみるみことのわしてのゆきく

猛獣も人をあふてはそれをちやむむ

止

へ迷射てさしとあるよりひとるわ

おもあやまち

おちはくて樹よりのほりて矢色こと

懦弱　立錆

ろおそけるういろめるさちをきさ

無主

ばて天皇をくいはつ人と天皇み

ゝしをもはてはきとあてみあし

をあけしふゝころしをつこるわ

やんてゝるをこころさう人とし給ふ

ゆゝころゝゝゝゝのぞんて哥をよみ

て云

やまみしらまつおほ者とのあれ
そしらあいのうせ者かしこみと
うけのほうしゆうをのうへのそう
のえらあもとを
皇后きこう然かれしんてみまひ
をおこしていきあてまつる給ふみ
とのゝしてのゝさまはく皇后と天皇
よくみし給ふしてとゝまつりかつ
ミ給ふうゝうつてやさはく国人(きみ)これさ
うさく陛(きみ)下うゝしまひ歎(なげ)くこのこ
ゝ陛下うゝうぎうゝいは陛(きみ)下
嗔猜(そうさい)のゆゑをもてよりをころし給
ひ、陛下いはよくいはく射狼(おけうこ)さとんなうと
し天皇をれまちゝ武さまうとゝ
車うゝてまつりてうゝ給ふうつとせ
をもひ給ふのゝまはくさのひれ
人いこれとけものをかれを脇さう

為りき。ものをいひて云ふ
及四月百濟の加須利君（蓋鹵王）池津媛
（適譽女郎）のやきころされしを聞きて
きてそりて云ひしの女人をさてまつ
見て来女たちをつかはして
ふりて我国の名をうしなふかいまよ
をゆくさき女をさてまつる想ふ
はたれもち其才軍君（混支君）に告て云
汝（やまと）日本に まうてゝ天皇に仕ふ

まつれ軍君（えとき）こゝて云上君のみこと
さも奉るべしとて和ものも君の婦（あね）を
さまつてのちは ゆるしてまつる和
へかもち君はたれもち 多ものを人るを
もてそてに軍君（うえとき）にあもせて云もぐもち
えんろ おんのそてにこもむ月に ゆるしを
りみちにおみて子うは和ものい
一船にのせていこゝ人まゝいつこに（何処）
あるものをみやこ国にもらしめよ

みるとまをさして朝まゐ奉る
辞訣
六月ひのえいぬの朔日きちんなる
してかぞう君のうくなることはくしの
谷羅嶋まおおて児をうめうとてこの
とるりもて嶋君といふこと軍君を
なもち一永をもて嶋君を国まをる
こし武寧王をん百濟人を嶋をよんて
王鴻をふる秋七月軍君京まいる
をてまして吾まあう

百濟新撰云かのとのうしのとし蓋
鹵王おもく琨支君をまゐしてやま
とまもとで天皇まはかまゐし
めて先王のよ　をおさむ
六年春二月ミはのえねの朔きのとの卯
の日天皇泊瀬小野まあそびまん上野の
なをみそるはしてけひてみおりいと
躰勢　概拙　感
おらして哥よみてのゐまはく
ゐをくのちはせのやはいまち

のようしきやまとしてのもし
きやまのこりまくのもつせのやまい
あやこうくいあやうくて
こゝに小野を名はけて道小野といふ
三月のとのこの朔ひのとのいの日天皇
きさき妃をもてこれを来こうせく
りて蜑ふこもをはとめしめんとおほせ
こゝに螺贏一人の名よりたほせて国内の
蚕をあつめあさせのこゝにもろあや

まりて嬰児をあつめて天皇まうて
まつる天皇おほきに喜ぶまふてまうこと
もろもろまりてのこほくいまもろ
こゝにこれのこ ひろせもろもろ養
まうことをみうきのもろ養ひよて姓を
こゝひて少る部ちいさこの部のむしとしの夜四月
呉の国よりはこひをまうてこれき
のさてまつる
七年秋七月きのついぬの朔ひのえの

日天皇ちいさうへのひるしそうるよみ
ものぬしてのうるまはく朕うるち 三諸
るの神のうるちをえんとみる
或をこの山の神をい大物主神をは
うばなり或をうぶのをさこの神 墨坂
なり
いまちうら人よをきさわうたの
らゆきてうへてまうこをうる
うるつてまうさくこころをよるち
てうるつへんをれちちみの諸のちか
よのほわて大ちうおうちをとうへと
ぬて天皇よりてまりる天皇のいと
しるをれそのうをひうのひうまれ 雷 月精
こうやき天皇おぢうふて目をおほ 畏
赫
ひてみうまれして殿中おかうる
まひ兵 岳
をうしめたまふてあ
さめて名をさのひていうたちとん
八月ものきひのゆけべのおうはら 宮者 方削 庚寅

あるときに家よりまうのぼりきひの
ちかきたちもの吕前津心（さきつや）或本之国造 髮吉備臣山 おも
そをとくゝ知て月をまちたるあ
てゝやこのあてまつりあげそ天皇む
けのきみ尚そ（のたまとゆきに）
しむおほそら（大夫）めされてまうゝ来て
まうとく前津屋（さきつや）をとめをりて小女（をとめ）天皇
の人とおほめのこを（大女）もて其のゝ人と
してきそふてあひまこうあをと

めのたをとゝてハきそれいまちをぬ
きてこうそまゝにこうきをまは
とりをりてもひて天皇のみまとわと（雄）
して毛（け）をぬきたえさきをきりおは
きれをまとりてもひておのゝ
まはとりてそこうのあこを（距）
たをてきそふてこれをまこうゝ
めたふりゝまちとわのゝをみては
まあちを（杏）めをとこうたとまう

さて天皇このこと(詔)を成こうめして物
部のいくさ(兵)ひと(士)三十人をまうして前
津屋なるひとや(族)七十人をこうさ
しむこと吉備のうへ佐ちの
呂田狭(さ)おほとのうちきんつわ
てさうんよ雅嬢(うひめ)をうきまほめる
里て云天下のうれまき人さうら婦(め)よ
しくいなるんと簾(ゆ)やうまさちやうし
てすうくのうほそ(好)ほそ(茂)れそあうう

うにこやうまくさ(相)のうちうれそ(足)
いうもはくうちそうとを
ひうき世(教花市佛)ようぐ(蘭沢亟加)ましるんうぐ(尚)
いま(時)すはひとうちそうれうん人
とまうん天皇みをうふけてそう
うまきうめてみうろようろ
こひ(ゆ)そしちこはうまうと欠
をもて女(め)邦(ち)ん(と)おほして田(さ)
狭をことうきてみまれの国のみと(司)

りちなる 俄 ぞくして出うひめ
をもの事 ぞさの呂出うひめをとなて
兄君 君 君をてうめる也
別本云田狭の呂の婦の名ハ毛媛
とゝふ 玉 ぞきのそなたひこう子
玉田のそくよのむそめかまの天皇
三かまの 餅 貌 ぞきこうしとめし
て出とを 丈 ぞころしてそなたの
殺しなた 幸

田狭をでうこう所よりて天皇そ
の婦をめ 幸 なたうをうきまはを
てうそけをめりのむとおもて
ぞきこいまを時ぞきき中国なた
くまうらハ天皇田狭の呂の子おと
君ときひのあまの 海部 直赤尾とゝみと
のをしてのうまけく いまもべゆき
てきまをうて 内 ぞこうる西漢の才伎歓
内和利みめとう 側 ぞきんへきそれをうぞ

人てまうしてまうさくやはれたち
さそこ(巧)ものの船(奴)多(こぞ)うゝ国ゝもんを
めして此のいつくしき天皇まちきこ
さもよみことのわしてのくまはく
ちうゝいまれもち歓(よろこ)国和利(わり)をめておと
君ゝよそつて道をくゝゝよとるひ
よみことのしふをくゝしまひて
さそこ(勅書)ろりをさてまちしめ
ものゝまふこそ才君おほせをう

けはいたりろゝをひき(平)井て行て
くゝゝよいゝてゝ其国ゝいゆくる
此神老女(ゑゝ)ゝおもてこちまちよみち
よあつわをと君はきて国のをきち
うきを訪ふをんれこゝて云まゆく
と一日ゝていいゝ才君をは
ゝうちをきことをかりゝてう
をてうくゝのたてさはきゝ
いす貴の和(ひと)使を大嶋の中ゝはをて

風ふき始めていまだおさまらず
と思ふこと月をへてこれみまれの国のみと（任那司）
もち因狭（ささうえ）にまれまち才君うるはしく
てうるはしくとしのびよん
をくくくよやさて才君をいすめ（戒）
てこいまくらひ（領項）何のるいとはつ
て人をうたやつ傳はきく天皇吾婦
をめて（幸）てはひよみこちまれと（決）
こちてる上の
久りゆ
いつおそくくいまきひ

の才をもたんことをあしをとくて（濟）
まはしこ吾ふいまいくくよこん（誇）
ちてやまるるひそ吾をこれ（任那）
よるこ（日本）ちて（有）きやまんよかた
才君の婦（掃）くをひおほやけのこころ（国家）
ふく君臣のこいわるしうなる忠（まめ）
ること白日（功）こんすひくろとこ松（青）
をここをのみうとくふくんとをる（謀叛）
こををくんてひそうるそのおとこと（盗）

うして移やのうちにこうくしうけん
てきれもちあさ（国内）のあい赤尾とくく
もうふてきつかるくれもくの女伎をひ（将）
きみて大嶋ようもんつか（キ未）天皇をと君の
もんつくぬゝをもを弐こうのして日ゝ（廣）
のきし堅磐固安錢とまいけ（三）
かひとまよかくわとやさけひまを
るもちやまもの吾砺のひろきけのむ（廣）
よもんつくりてやミあるものたほれ（安置）（傍）

よりて天皇大伴の大むし室屋
よみとのわしてやまもあやのあい（東漢直）
掬ようおほせていまきあやのもくけくりへ（新）（漢陶部）
高貴くけくりへ堅貴ろうきへ丙斯羅（漢）（部）
我の錦こりへ定安那錦おさうへ卯安那（屋）（部）
ホをりて上桃原下つきもうみの原（真神）
三所ようけしもんつくむ
或本云きひの臣未君くくり
まうつりて漢手人部衣縫部害人

部をくてまれる部をよ
上同く
八年春二月むさのくの青ひのく
村主　檜隈
身狭
ものくみを博徳をこれのひと
民　使
て呉の国よりまれる天皇のあさつ日に
きちうしのしいたちわこよりいくち
まてちうきの国そむきいたちりて
談
こたぎくてまたちうさちことしまは
芭蕉
なりしたそおはきよ中国のみこ
ちをおそれてうしみを高麗よおさむ
こき
これまてこさの国精き兵一百人を
まくしてちうきをこ国のりむちを
らくあたてこ国のいくさひと一人あ
取
うさ
まこひて
さよ国よりまを時よちうき
人とりてうまひとちれしひ
典馬
そうよかちをてえいまの国吉国の
さあよやふちをてきんこと久しく

一本云汝の国をすてて吾土なる
人とうしなし
かのむまひきていはくてやむ
まして（典馬）をくれめはひ
よ国よりけ入て其うらひをとくこ（説）
こをもちまの王（こき）をしもちこのいはい
をもまもることさとわて（知）はひをす
さしてをせて国人はなてを家（弛）
の内よりやしなふをもちのをもの（雄）

をうせと国人こうをさとわてこと
とく国よりあゆる高麗（こま）人をこうを
らるこすまをせる一人ひまを来
てのうを、ことをえて其国よりを入て
をしはるさる（考証）こすの王をしもち
いくさをおこして（筑紫流）はくをくるのさ
ようむ（或本云都久斯岐城）はひようひまして
樂（ゆく屯聚）をおこしうをきの王（こき）夜こすの
いくさの四面よりうをひまをきてある（賊）

のとくくるきの地に入ときとりぬ
それもろ人をしミれの王のりとゝやる
てこゝの王家国とうけこの時よあ
はてもゝあ
れと国のあやうきこと卯をうきめ
よすきあいのちのあがきこのきハ
るぶのそくさる所ろうてふく
ひとやまものみとちのいくさのきみ
さちのとまいこれよはてみれの

王いての臣 班鳩 いうきひの臣小梨
あまいのきゝ 吉士 赤 目子をそゝえてゆき
てしらきをきくりむ叩いての臣小
いまいゝゝいしていほをゝさ
ぬこまのゝくのいくさのきこいま
うきての臣小 将 とあいゝうゝ
てこれおそゝいての臣小それきちつ
をあていくさを行きゝ姫いくさ中ゝの
をこちてそみやゝをそれつを明て

促 攻見

きたりよせ、めてうつむ（攻）高麗とあ
ひまりること十日あまりのそれもち夜
さうき（険）而をうちで地道（しのみち）をの
てとくくよ輜車をやとてつくれうる（過）（奇）（兵）
いくさをまうあらあけほのよ言麗（會明）
つてての呂ふのうれんとちとおもひ（謂）
てとくくいくさきまうていふそれそ
ちくせいくさをとちるたてうちいくさ（歩）
ひきいくさをけ（騎）せめて大よこれを
やうは二の国（こうとそ）をふのあるこれあ
してるれをつての呂ふちきまか
よとて云いまいうてちを光をのつて
いうとてはきよあるりみいくさを（官軍）
くいまいうるはいたのれて由さる
人の池よちるんほうんど出えうちよ（伏）
いまいゆくさあある天朝（みかど）をもき
さてまうんや
九年春二月きのえ辰の朔日おけ（九）

うちのあい香賜とう祈めをす
河内直
さしてむろつの神をまつしめ
ふる香賜とう祈めをする壇所と
つくりて海さよ事をおこなんとて
ろをもうんて其うひめをおうした
天皇これをきうしてのさまは
く神をまつりてさいをいのりつ
はしまろつきやそれをもつまけるせ
てもんつまて天皇まつ弓削のむし

豊穂をまつりてあまのくに国内県主
りとめさしむ河ひよ三嶋のこほり益
原まつりてころ斬三月天皇これる
らつきをうんとおほせ神天皇よ
いるめてのまはくないまそ天皇
是よりてもしていませ紀の小弓行
のもつそのの韓このもつ大もの伴
つのむし小康火宿禰ふみもの
談
もしてのつまは新羅西のくま、おわ土

しよをつくりて（兼）てさのふとれくこうたきまつるるしを
朕が天下を王しうちんて（稱呂）みを治し
まの外を投てあとを迦羅（てう）のほうく
そこまのこたきを（呑）ふせきくくの城との
こいちんやまくまてくるとをてよ
らてこたおはさしをとなりおほ（狼る）
このこのあきこうろあいてうちう（飢）
へていたくいまの（野）（心）（飽）
くうのまちを武こを

そこをとくておほいいくさのきみ（大）（將）
とんもへいくさをもて天羽（うつみ）をせめ
うちてたこうこおころへこる紀（きの）の小弓（をゆみ）
のくくの大伴の室屋（むろや）の大むくしをて
天皇をうかへまくて（呂）
つるくくりしいくるたこんておほ
人をみをうをくさくくし今
呂ら婦みまくあいうなり呂を
くみやのなりこいかり

ちくい王さまこの事をもて仕ふ
天皇よまうせこうる大伴の室屋の大む
らし仕ふさよ海うい王をる天皇
家こうめしてかるひなけき仕ふ
て吉備のうへ仕ふ紀(きの)のかう宿祢(すくね)大海(おほあま)をも
さうてみやしるふををつひ
よあひしをけてりて仕ふ紀のか
う宿祢かをれをもちをきを入てゆく

行屠し並

ゆくうをりををるをるを行並撃をきの王夜发軍四面よ仕ふみう
仕ふを吵てとくくる咏の地をうる
ををしてをあをのいをひと馬
いくをよまをひすぐうををて大よ
ふれを小う宿祢おてあるのいく
さのきをを陣の中ところて咏の地
をくくよさをめ川のうのをう
をうを紀の小うの宿祢まく兵を

さめて大伴の談のむすめふといくさ
をはたとてまく大よとのてのさゝ
とゝうとゝこうこひ大伴のうゝる
のむすめをもひ紀のちさきくめのむ
らしえしきいめうひて死をうゝ
るのむすめのち人おひ姓津麻呂
のちよいくさの中よ入てその主をもむ
後軍ちとあ出て問て云吾主をもむ
大伴云いはこよまうゝ人をこれを

はけて云いまうゝ主等いちうゝてあ
さの半のうゝ夕ゝこうされきといひて
ゝうゝの処をさうゝ方めそはきろうれ
を笑てふみけひて云主をてゝ、
ゝあ何をもひて叱ひとうひちゝむ
ゝあゝちゝゆきてゝうゝよゝあ
ちはゝくあはてのうわのうゝをの
うゝよゝてめみいくまゝうゝはた
てちりぞく大将軍紀のふゝの宿禰や

まゐりてうせぬ　文安五月廿日の大磐
宿禰父そなたみうせぬと聞て急
ぎ馬にのりて小康養のまく
禰のもとに兵馬船官をもひも
ろくのこはをとりてこゝろちぬ
こゝに小廉火宿禰ふるく大磐のまくに
をうみてをしらいはをつてか
らこのまくにいはを云大磐宿禰
ふるくこはまきにまゐこ

のまくにのはをとりてをうこ
んと久しくのうしと禰のまくにふる
くこれをもしこれをもつてこの
まく禰と大磐のまくにとひさあうこ
とくくの主やもまくの諸將いさまき
事によりてひまにわと少てをれを
ち人をうこまくにひらるはをはて云
国のまくにをみせまゐ人と物ふ請
ゐてませこをりてうこのまく禰
韓に

ホむさのくちをなくてゆく河よ
いるるをうんて大磐宿祢馬よ河
よ丸ふこの時うこの宿祢うろよ
もして大磐のそくひのくるほのの（鞍）
後くほをいる大磐のそくひおとろま（尾）
ものうつきこてのこのそくひを中流（なかなが）
よいをとてころしたこの三ろりの
まちきみもとよわあひきをふてこ
きを道よせるよわてくくの王の

宮よをもんしてきうそきうるぬ
こうこめ大海（おほみ）小子宿祢のりのさう
はてやまとる海うくはひよ大伴（おほとも）の室
屋の大むしよう（まして）を妾（やつこ）
蓁（ふく）所をきこれ孫うもくいようきこころも
しめの人大むくきれそるあるこ
きを海うそ天皇大むくしよみことの
もしてのるまはく大いくさのきこ紀の（将軍）
小子のそくひ龍（たつ）のこくよあるる席（むろ）の

とくまてうる　八維を見そなわす
をおほひうちてよものくまをくまなく　四海　祈
きはくうしなはしもち才とをきく　衛
まくうもちていのち三のくまをもて　韓
ぬもぐ欠くをいるてもふのは
うさをあつつしまる汝大　視喪　伴のまち
きこと紀のまちきこらとをれ国
ちかきさとの人ようて　陣　由来　ゆうこと
ひさし才れこよ大むしおは

人ことのうをうせるまちて土師のむ
らし小島をしてもちをさむさのむ　家墓　田身婦　邑
らはちうしのてこれをもふれをた
まりて大海　おほみ　よろこびてものう
えもうさしして　か韓　やつこむろえまち　奴室　兄磨
おとまろみくもち　ヲ　戸呂　邯倉　小倉　針　六口をもた
て大もしまをくう　吉伎のうつつ
ちの蚊嶋さむのやけひとこれ
なり別ようこ小鹿火宿祢紀の小子宿祢

の喪なりて用てきこゆる時なひとり角
国なとゝまりて倭なのむし（伊の姫法ひとりなる）
人をしてやまとのかゝみを大伴のむし（尺）
なをさてまたゝしめてのこうて云やた（祈請）
れ紀のまちきこと（御）ともなる天朝なたか
まりるゝ（地）し故角国なをんつゝん
とふらをりて大むしをめる天
皇なまちして角国なをんつゝ
む是角臣ホをめて角国なをんべ（居）

臣て角臣とるたきゝこゝとこれなる
ゝまれを　秋七月　月のえゝつ
の翔日かもちの国ゝ国ゝさゝあハ
人のこほりの人田邊（史）のふんひと伯孫（書）
がむをあふゝのちのこほりの人文人の
をゝとか龍（首）の妻なりをんもあ
の児（こ）うむときて　ゆきてむこの家を
ゝこびて月夜ゝをたいちひこ
のゝの誉田（ほんだ）のみさゝきのもとあ（赤）

きむさまのゆしひとしけるその馬と
きよめこと（護略）して龍のごとくはしり
あつさ四よさうくぬけて鳴のこと
くるおとろくあやしきうちかく
なりてこともむかうのうちもくれて
てうそくそんちう（相）はきみて心
ほくおもふそれもちのれる所の
あらちの馬よむちうたてかちらと
ひとうう（くつ）嘈をなる姿をしもち
（所）

あうきむさこえのびてぬけさてる
ことくちうよみのそ（驅）さい（驚）ちは（迅）
というちほうそう（減役）してうせめこ
とはなるうちの馬をくれてあるを
そくしてまるおのべうは。のもの（駿）
むさよの走るものもくそんはほつ
る所をさとりてとすりて馬を
入てあひ辞（うつ）てはつれをんうめを
くそんとまむさをえてもるもう
（騎）

よろこぶとくしてたむまを入てく
をれうて馬ときまくさかりてゆ
ぬるのあるゝ河しらさあうきむかた
りて土馬よるれりたくそん心よあわ
しんてつくりて誉田のみさきまる
ともよそれもちあるゝもの馬の土
馬の間あるをみてもちてくてえ
一疋の土馬をくらう
十年秋九月きのとうの朔ひのえ

孫の日所狭の村主青呉ちさてまり
きる二の鐵をもてはくしまいるこの
鵝水間君の犬のくめよくそれて死ぬ
別木よ云こうの鵝はくるの嶺あり
さめ泥磨ろ犬のさあくそれ
て死ぬ
是よりて水間君をそれうしてをの
はくるりそこと鳴
十候と養鳥人とをさてまりてゆ

て法をあげ給ふ人と為りて天皇ゆ
ゑ給ふ冬十月きのえうの朔
のつちのとの日水間君のさてまり
まつりたりい人ふをもてかろの村いと
迹の村二所よりしむ
十一年夏五月つのえいの朔あふみの国
衆ちのこほりまうまくちろき
うしたのたちすりたんごりさと
鶏
うせてみとのわして川瀬のを

ほをたをりの法秋七月くろうの
国ちのまけまうけるる者あるたか
らるのりて貴信とふまき貴信とさ
うしい呉の国の人ありいたれのれ
のことひき壇手屋形麻呂ふたそのの
琴弾
のちる冬十月鳥官のたうるの人
のいめのくめよくいりて死ぬ天皇いう
ほまりてをりてをきさて鳥養部
となせりこうる志れのく国のあるいの下

とむさゝの国のあゝいの下とゝのみて
あひうるをて云あゝるを国よりうちは
ゝをけう島のさうきを小墓よりおの
あゝさ物ふべよくゝふゝるをゝの
あをわいのん今天皇一のゝのゆよ
ゝをて人の西をきさうふゝをれゝ
ぶあうきゝゝゝをあゝくゝさ
ゝまゝ主ゝとまゝ天皇きこ
ゝめゝてゝゝをはまゝめふゝ面

下ふゝちまちよえゝをれつゝゝみ
とのゝゝて鳥養部とるせう
十一年夏四月心のえゝの羽つちのゝの
うの日身狭の村主青ひの檜隈くさの
ゝゝはゝ博徳ゝゝ呉ゝはのゝゝ今年
月ゝのゝのゝのゝの羽ゝのえゝむさの
日天皇ゝゝくゝはゝの御田一本云猪名部御田小くゝあ
やまゝるゝよおほせてゝうゝはくゝふゝ
よ却田ゝのゝのよのはゝてゝくゝまゝゝ

しろことひろまりてくよあり時さい
せのうまめをんてあるひてさを
のくをみてうのとく行ことをあやん
て庭ニふれてさくとる示の饌（とのの饌ハ御膳の物）
りとこほしつ天皇をしもち卿田うの
うまめをおうせうとびまてころ
さうをおほして（新）物部よさづきさま
時ニ参酒ニおほんまるをんう琴
のしらとりて天皇よさきしあそば

らんとそひて琴をもてひきて云
かむうせのいせのいぜのぬのさくを
いほふらけてしかばくよまてるおは
きみにうしくばうくはほをんとさ
いのちりなくくもうといひるく
みをやあさらさくみをや
こよ天皇ことのしらをさとりまてそ
のはをとゆるしはしこのやをと笙田（玄孫）
十三年春三月さほひこの（狭穂彦）

根命（ねのみこと） ひそうよう あやまつの小嶋（こしまこ）

おうせり天皇きこしめしてさよの

みことをもて物部の目の大むらじさ

ばらてせめさしめあらふる祢の命馬八

足さち八口をもて ばらばらとさりそで

すて帝まみて云 板除

やまつのうすこゆるひとらふ

うすのやばそをきくるの

目大むらしきこてこれを海そ天

皇ハ八つの命のしるの物をもてあハ 露

餌香市邊（えかいちべ）ものこころよをの 土

めてばらよ之のの長野むらをての

ヘの目の大むらじまふ秋八月を

ヒヤの国のあ井くすの人あやしの小 限 文石

磨口（まぐち）ちうこちく心ほ井まをして

あらくさうさする 暴 ばつさあうちの 麁

中よちあらばらかをあてうちゆき人

をかうりめハまうあすびとの 高岩 ふをを

とくとくもて　しうげひとりまて
国の法よさひて　さきちうこたをを
てまつる　祖　天皇　春日の小野の賦
殿大樹を　ちうもて　ちうけきひと一百を
ひきあてる　敢死士　ひとりもて
宅をかこてやく　時よほのほの中る
まちうきいぬあちうさする　出て大樹の
を切そのおはきさ馬のち　大樹
さまおちうて　刀をぬきてこ
色

きをちうもてをれもちあやの小麻
呂よなわぬ　秋九月　ちうくこ猪名
部まる名をもてあてとして斧をち
て材を　真根　きつる　ひめしきつまちあや
まりて丸　ちやふそ天皇その所よりて　遊詣
まりてなやしみとりてのちまちり
初る石よあやまちあてさろやまちうく
てまちうく　ちひよあやまちこまちに
をれもちうあをめちて衣　きの　裾をぬ

うせてふさきのすてあるれる雪
（著墳皇）
てそすしとらしむこよまきあそく
やめてあふきみてけけるおほくそ
てものあやまちをみをやふけ天皇よ
けてせめてのまちいけとよあし
やけこそ朕をおそれてさしの（奴）（真）
らぬ心をてこうるやまこう
けとのまひてよて物部よさけて
聖よころきしむこてよあひさくみそん

つのまををけきあらしとて哥
をよみて云（作）
あしきを井をめくみかく
そみるそとうるけそふかけ
むよあらそるる
天皇この哥を式うしてめて入れて
悔（く）をなしあらしみるげひてのう
まけくほもむと人をうしるひ法や
それそちゆうしほ（けく）ひをそてうひく

ろこ国よりのせてきせてこれを所よりて
しめてやめてゆきてゆきひげ
なをとくとりてまつる哥をよみて云
ぬきまのひのくろこやくきせ
いのちたしまひのくろこや
一本いのちたなまし
いしうそあまをとこて
十四年春正月ひのえとうの朔たちのえ
とうの日むさのきくに青水沫の国の住
ひとりもる呉よりまうてきまつる秦人の初

伎（ひと）あやいとりくしそとりをとしきめて
ひ兄嬢（漢織）をとひめをひきあて（呉織）きみの
江のほとりまつこの月呉容のさめ
道をたてたちかたてくしさのと
なたく三月臣連（をみ）よみとのうして呉
のほのひをむくてきれきを呉人を
ひのくま野（檜隈）をんつくしむたて呉
原となたくきめひえひめをもて大
王の神よりてまつるおとひめをもて

あやのきぬ　ひ部とな　せのあやとち
くれもとのきぬ　ひこき　あたりの衣
縫部　せのきぬ　ひのさきろう　文四月
きのくもまの翔日天皇　くれ人　よこあ
さかいんとおもて　まちきこ　ろち
よとろわとひて　のろ　まくそのあいき
けひとろ　れのうかろ　んまちきこ　ろち
これまろく　根使主　のろこ　ろん天皇
そのちち根使主　ろみとおほせてあい

けひとろ　れのうあいそのよのさろ
めけ原　おもて　吳人　ろこ　あくさろ
時　ろこのひ　ろとろ　をまろて　ろそ
ひをみさ　めのろ　ろと　ろろ
して　まろく　根使主　ろは　ろる玉
ろろ　ろのろ　ろの　ひろすて　いろう
ろろ　まろ　元人の云　さきろ　はひを
ろこ　時ろ　まろこ　れをつけ　ろろま
そろろ天皇　ろはろ　みまく　人と春

高
秘
兵相者

して居むらし
ほしせさしむることとあつせし時のと
くおほとの、前まそろへみ給ふ皇后と
らまあふきておほなけきなきいさち
てかなしひの天皇とたてのるまは
く泣さまやと皇后床ちおのてうる
へてやさすはく神王うたをもしやや
川この兄大くさうのみこの穴穂天皇のお
ほんこころをうきてやたれを陛下ま

さてまつり給ふとき妾のうめまして
まりまる物なり故うるひを根使主ま
いてをろのようなみるりていさう
きんつるこまうし給ふ天皇きこうめ
しおとろきて大まいりてふく祢のを
うをせ矢給ふ根使主うるへてまうさく
うへなりまこと呂のあやまちうと
ぬうて根使主ま、みとのうしふまさく
いまよわゆくさきうみのこのやそ代戎

まちきこの法師まろ あはうそとの
まひてそしりもうこれをきゝ人ゝ
始め根使主よきゝて日根いなわ
て稲城をはくりてまちゝふせひ
よ宮軍のゝめこりもれぬ天皇法の
さゝよみことおはせて子孫を二つ以
けて一分をハ大くさ人の民とせて
りて皇后封しまつる一分をハちぬの
あゝめしよりふてふくろの法きひと

とこれをもしりて難波のきゝ日香とう子
孫をもとめて姓をさうひて大草香部
の吉士とこれうの日香とう語ハ穴穂天皇
の紀よあゝ事年てのち小根使主根使主
ゝ夜ふて人よりて云天皇法て
よこの語をきこしめして人をして根
使主うしをえせ殺ふまこるかの
云のゝ夜ゝゝてこゝ法根使主
うの土坂水臣となゝことこれゝゝ

十五年秦氏あつまりて臣連ホ
おのゝ祖ゐの事まゝよ駅使秦造を
ゆるしたまふ　てうれいとして天皇よりたまふる天
皇うけたまはりみことのりして秦氏を
ちりて秦酒公と云て百八十
種の縣をひきゐて仕奉るものみつき
さてまりをきぬうちをみつとよみて元朝廷
ほむとして姓をたまふ　鎌倉ひて禹豆麻佐と云

一云うけたまはりまきこしめして仕奉るうち
十六年秋七月　みことのりして宜来国縣に
来をうゑしむ　秦氏をなのりうら
して仕奉るものこゝに仕奉きてまたし
ひ冬十月　みことのりして漢部をあつめ
てその伴造をさゝめて姓をふひて
直といふ造をさゞめて姓をふひび
直といふ

一本云漢使主ホ姓をふひて直と云

十七年春三月しのとものうしの翁たちの
くの日土師のむらしふよみことのゆて
あさゆふのおものりつきよりまうたち
物をくてまたくしむこてゝ土師のむら
しのおや吾筍(あけ)よりたのくよのくさこの
むら山しろのくよのうちむらふこの
むら伊勢のくよ茂うむらをもさんば
きちさいたくのまくくの民部(うさべ)とる
てまたくなりきて贄(にえ)の土師部(はべ)といふ

十八年秋八月たちのとのいの翁つちのえ
くの日りりくの菟代(うしろ)のをく孫ものく
の目のむくしを朝日扉(とびら)いくさいくる
と冥てをもたくろ伊賀の青墓(あをはか)よまち
さこうふこたくかりてゆをいくよ
みいくさよりて云朝日扉ゝ手まる
ゝ人ゝあくつきそのをくつやをふ
くくろしをごくるみいくさこれおい
うしろのをくよあつてをくみうくい

まもりこと（相持）二日一夜こゝに物部の目のむ
しろ三たびうゝふちとりて佐くしの
間のもの〳〵の大おの（斧）てをして楯とこ
らしめいくさの中に叱（シテ）てるまさ
むあさ日部をしたちもちゝまみて大
おのてゝさてふるひをいたをし
てなゝひゝ身の肉に入と一寸（ひとき）大おの手
さてをもてものゝ目の目のむしをさ
しうくそ目のむしまれいち朝
日部をとゝてこゝろしたこれるまて蒐
代のさくゝゝうさゝちをもちて七日
まてうゝとはうゝ天皇おりと（侍）まち（臣）
きみさとゝてのゝまはゝうしろのそ
くゝゝとうゝとまゝろこゝまさ
ぬきの田毛別（ミケワケ）といふ人をうてをん
てまゝうしてまゝうゝうしろのさくよ
はゝるゝて二日一夜の間まあさ日のい
らはをゝうゝふゝこゝとあるをしうゝ物

のへの目のむし　はくしの角のもの〳〵の
大おの手をひきあてあさ日の扉を
とゝころし　はとまろい天皇きこし
めていわまして　それもちうしろ
のまくひのさもてゝ　指名部をとて物奪
部の目のむし　まうこうわ
十九年春三月　ひのえとゝの朔はちの
えとゝの日みことのりして　穴穂部をおく
二十年冬　高麗の王おほきよいさを

おうてくゝをうちほろぼそこと
をこうまをしたうのこわのゝゝあつて
倉下よいたゝみおきうよそてよはきて
いさはゝとこしふうこと高麗のゝ
ろゝのいくさのきみ王よ居うして云
ゝゝのおゝおひのほうなわ臣はは
神よこれをみうおほつゝこはう矢こ
とをおそゝくいまゝ人まゝうゝ人うふ
はひよゝもん王のこよくしあゝ寡

人きくくゝの国ハ日本国の官家とて
あるくゝことひさしまゝ王入て天皇
州由来　遠久
よたうまいりゝことゝゝよりよりよりゝ不な
ゝとしてたゝあるやうとぬ
百済記ニ益爾王きのとの卯のとの
冬柏の大軍きゝたりて大城をせもろ
ゝと七日七夜王城くゝりおもちたひよ
尉禮国をうしなひ王をよび大后
王るホこれあるの手ゝ没ぬ

二十一年春三月天皇くゝこまのゝめ
よやゝふゝれぬと云うしめて久麻
那利をもて汶例王よりびて其國を
そくしおこハ時の人云ニ百済國やゝ
そてゝほろびて倉下いをこうれゝ
こいつゝ国ゝ天皇のこゝ国のふゝゝ
よりてまゝ其国をあせり　造
汶例王ハゝゝゝ王のゝゝゝゝゝ日　母弟
本旧記ニ久麻那利をもて未多王

よさまにけり是あやまりなり

麻那利ん任那国の下哆呼利縣を

別邑也

二十二年春正月佐ちめとの子の翔日白

髮のみことをもて皇太子とす秋七月丹

波の国よさのこほり管川の人水の江の

浦嶋の子舟にのりて釣をしたまふ大

亀をえたりしかばたちまちにして女

こなりぬ嶋の子感てもて婦としてあ

ひしたがひて海に入ぬ蓬山に往

ぬしりてひしまをめぐりみる語別巻

にあり

二十三年夏四月くるの久斤王を

うしなひ天皇昆支王五ぬの中に第

にあるる未多王の幼年にしてさと賢

てみことのりしておほうちにまして

三韓にかりべをもてみことのりの病んこと

をして其国に王となしてまつる兵筮

のとさうぐらなるひとつくしの国のい
くさひと五百人をまうして国まも
をとくるもの見東城王（ひがしきのこし）こと百
濟のこたきもの伝（つた）へたるもの例（たぐひ）まれなる
伝（つた）へのあちの殿むまもひの呂木ふい
くさをひきあてもてこまをうつ秋七
月のものとのうしの朔日天皇こやまひ（復疾不預）
さすみことのかしてゐ伝（つた）へおさ
ておほいなるちいさきこころなるひと皇

太子（さのこと）まさいなるはのふ八月かのくむさよ朔ひ
のよのの日天皇こやまひいまくおも
百寮（つかさ）ことをし（辞談）伝へ手をとりてなげき伝
大殿（おほとの）ようこあるまん大伴の室屋（むろや）の大む
らしと東漢掬直（やまとのあやのつくのあたい）ことのちのみことの（遺詔）
してのこまはく伝（つた）へさまいさあめのした
一家（ひとついへ）よしてなふこと（万国）百姓（おほみたから）おさ
やすくてふものひなうちのひとふこ（夷）
まさすあまつみうろくたのうちをや（眼）

そうるせんに　却ほとりこのゆへよ心を
せめおのれをそもをはりて日こと一日
をはつむことハけしかほんさう
らのさめのゆへなわ呂連伴造（そもつこ）ひるく
みうとまいりくよのみことちくよの（国司）（毎日）（郡司）
うやはこまこのそんてまうでこいなん（朝集）
そ心府（こし）をはくしていまめみことの
そうこと初人ころなわさうんやことはいう（義）
それたち君臣ちうこうい父（そこ）とのる（情）

うこいるのそくい呂連さとりて内外（智力）
のそうふ心ようてあのの（ものさをる
くうそちやそうるうるまめん
さ却ふやまし（遺疾）あはたれて弥留大漸ふい
うこと却ものそれたれたち人
のるのるこうわ分（ぶん）なうなんそいふまう
人さし生常朝野（ちやひな）衣冠（そうくう）いまあさやる
ううしまこそをえそをしおもむく
まれをこと却いまい善（ぜん）をはくさん

言をあけてこれを申すべきこと
ととももてこそこそまこと
えぬまあれかいべきかい
こちまもらるいうつき
ぬくのことの事ことやめんと
そうあんおほむうをやさん
しやなきんとおもゆむいこのく
このこいるんれひをけさ
らんそでは天下のあはい事さへ

情をけくさへし今星川のみこ心ざし
しまをいぐきて行支このみおくよ
れはいまし一人いつくことあわ居を考
とい君ましくいかしふを考とい父
まくいなしさひほ川心ざ
とえてもは家国をおさめはうもも
まこう戮辱臣連あまのくうき
とおほんくうほとうるんそれ
あしき子孫おほんくうのたあま

きかるゝきる孫、あくまてあすつ
日つきをゝくゝ堪ゝ朕ゝ家
事といふゝ容隠ゝ大む
らしゝゝ民部廣大て国ゝうちゝて
ひゝきのみこゝゝ地上嗣居ゝのきみゝ
きをひゝをゝくゝみおやゝゝふゝうち
ゝいききうゝゝゝゝゝ行業ゝゝゝ
ふゝ朕ゝゝゝゝゝゝ堪ゝゝこ
れをゝてゝゝゝ天下ゝおさめ朕ゝゝ瞑目

な人をまゝうゝむつき
一本云星川王ゝゝあくゝ心あゝき
と天下ゝあゝゝれきゝうゝゝあさい
ゝひあゝ朕ゝゝゝ人のゝゝまゝゝ皇
太子をやゝゝゝいまゝゝ民部ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
この時ゝゝゝきをゝゝゝゝゝゝゝ吉備
ゝ居尾代ゆきて吉備の国ゝゝゝて家ゝ

過きれり後よりひきあつめて五百の石をもて
天皇かくれましたるとうけたまはりてそ
なをもちなひてゝ云吾国をもへおさ
めゝ天皇をてゝかゝあるわまぬ時
をいうしたゝつゝ〻いしてそれ
ちあひいきみむをそんてほちわのこたち
をおうあるゝ尾代家ちき侍
ゝをてゝをうさきの水門あ
てあひきゝふて蝦夷をいるある

ひいおとをあひい伏て箭をさゝのゝ
はひよゝぐゝれいゝをもて尾代ゆみ空津
うちし海濱の上ゝおとゝうしし者
ゝ弦
ゝもをいゝろさゝ二やるくいのやそ
てよつきめをれちゝ舟人をあてや
をゝふ舟人おそれてゝをきぬ尾代
をれちゝ弓をゝて未をとゝて奇
みて云
みちよあふやゝろのこあゝよそ

きこえはあるあ[illegible]いきこゝてそ
こゝひおそつてこゝは數人をころ
しはまつしめて丹波の国こゝはの
ふうけいをいとくくせめこゝろ
人をまつしてとくくころさ
しめは

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan